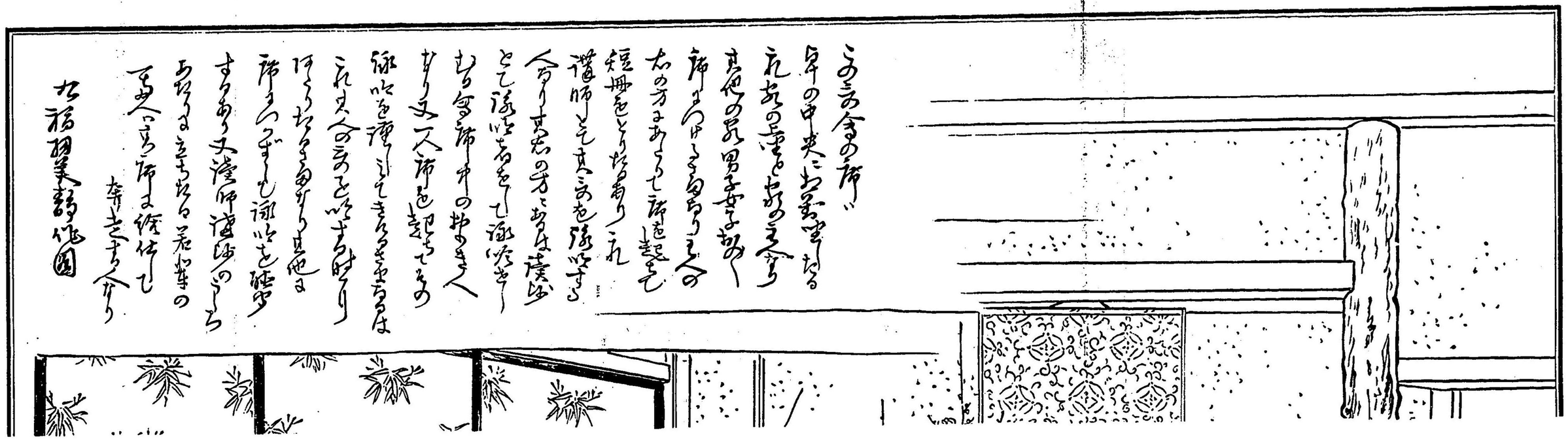
歌学入門

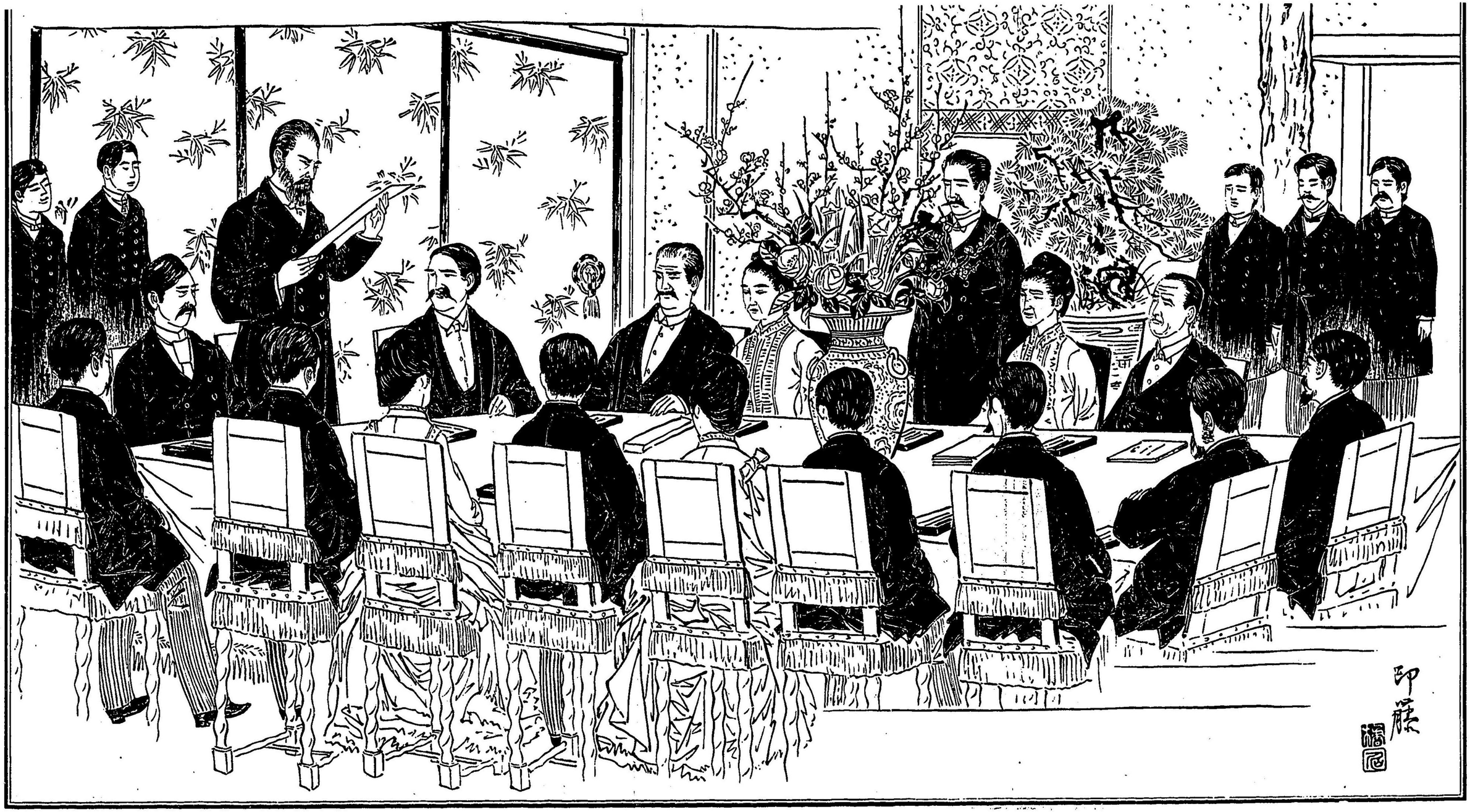
四隆正先生著
福井久美静子爵校

166
346
49

5·6
440

帝國圖書館藏




印藤

特50
440

歌學入門

大國隆正著
福羽美靜校

うたは心と詞と調とあひてなるものなりまづ詞をえらぶべし

つぎに調を撰ぶべし

三十一字をもてすべてしらべたるものとの三あひてなるものなりまづ詞をえらぶべし

つぎに心をにらふべし調とは五七五七七合せてゞけがらいひまはしをいふなりされば詞たゝしろふかきいつはりかざりのなきをいたれりとす

たとへ人倫赤人ふたゝび世にいでたりとも隆正がこのことばをばうけがはずゝんばあらじ

これを歌道の至極とこゝろうべし

詞を撰ぶこと容易からず

○ことば

今俗に用ゐることばはいやしきによりうたには用ゐずいにしへのと

とばはたゞしかりしによりうたにはいにしへのことばを用ゐるなり
いまのことばみないやしきにはあらねどつかひかたいやしきなりた
とへば花といひさくといふことばのごときいにしへもいまもかはら
ずされど用ゐかたいにしへといまと同じからぬなりいにしへはは
やさくらんといへるをいまははながさくであらうといふいにしへは
花はさきけりといへるをいまは花がさいたといふたぐひゝ又いにし
へは字音をもちゐずいはるゝだけは和語にていへるを今は和語にい
ひてよろしきことをも字音にていふなりいにしへあめつちといへるを
いまは天地（テンチ）といひいにしへつきひといへるを今は日月（ジツゲツ）といふたぐひ
なり歌はこのテンチ・ジツゲツなどいふ字音を用ゐずいつもあめつち
つきひといふなり又いにしへと今とことばおなじくてこゝろかはれ
るありこゝろもなじくてことばかはれるあり今これらのわかちをあ

らくしめすべし
ゝことばおなじくてこゝろかはれるたぐひ
なほ
今はそのうへといふこゝろに用ゐ古はもとへかへす心に用ゐいま
「ヤハリ」といふにあたる
さへ
いまはおよばぬものをとりいでゝいふ子供さへするといふたぐひ
なり今俗にさへといふことをいにしへはだにといへりいにしへは
あるうへにそふことに用ゐたり「春雨にはへるいろもあかなくに
香さへなつかし山吹の花」のたぐひなり今さへといふことをいにし
へはだにといへり「みやまには松の雪だにきえなくにみやこは野べ
のわかなつみけり」といへるたぐひなり今のことばにては松のゆき

さへといふこゝろなりされば うたに用ゐるさへはあるうへにそふ
こゝろだにはおよばぬをおよばするこゝろなり

あつかし
今はみずしておもふことに用ゐいにしへゝ見てはなれがたき事に
用ゐたり野をあつかしみのたぐひあり

やさし
今は華奢(キヤシヤ)あることに用ゐいにしへははづかしきことに用ゐたり「何
をして身のいたづらに老ぬらんとしのおもはんとぞやさしき」の
たぐひあり

いたづら
今はわろきとするをいふいにしへはしてもかひなきことにいへり
いまむだといふにあたる

わび
今はものさびたることに用ゐれどいにしへはたのむべきかたもな
くせんかたなきことに用ゐたり
わび　わぶる　わびし　わびしき皆そのこゝろなり

めでたし
今はいはひていふことばなりいにしへはほめていへることばありけ
り「のこりなくちるぞめでたきさくら花ありて世の中はてのうけれ
ば」とよめるたぐひなり

なか〳〵
今はあなどりがたきをいふいにしへはかへりてといふ心に用ゐた
り「あふことのたにてしなくばなかなかよ人をも身をもうらみざら
まし」

丶今の人のこゝろえたがへることば

あらたまのとし　又はる

あらたまのゝはるといひ又としといふことの枕詞なりあらたまることゝおもふはわろし古今集に「あら玉のとしのをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつゝ」とありあらたまのとしの終りとよめるにてあらたまることゝならぬことをさとるべし又はるのうたばかりにあらぬことをもさとるべし

雪ふるとし

ふるとしとはるになりてこぞをいふことばなり冬のうたにゆきふるとしなどいふはわろし

ものうし

しのび　しのぶる

つまこふしか

ながる水

つまこふるしかながるゝ水といはねばことばをなさず戀はこひてふるとはたらくことばながるゝとはたらくことばなるゆゑなり

にはもせに

今には一ばいといふこゝろなりにはの面といふことにはあらずせには迫にのこゝろゝ散木集に枝もせに夕かはなれりといふ歌さへあり野も迫に山も狹に濱もせになど例ありせのといへることはたにてなし

名にれふ月

名にしおはゞあふさか山のさねかづらといへるも逢といふ名にお

はゝといふこゝろ名におふせの山といへるも夫といふ名をおひて
あるせの山といふ心なり名にしおふ月など十五夜のうたによむは
わろし

袖ふりはへて

ふりはへては今わざ〳〵といふこゝろありそれを袖をふるにいひ
かけたるありたゝ袖をふることをいふにはあらず

ざらましを

ざらましをはずあらんものをといふこゝろなりましのしを濁るは
わろし「いそがずばぬれざらましをたび人のあとよりはるゝのぢの
むらさめ」嘉景集のうたなりいそがずばぬれずあらんものをといふ
こゝろありすべてこのたぐひのましをましと濁るはわろし

きのふこそさなへとりしか

このたぐひこうのむすびのしかをしがと濁るはわろししかとすみ
てよむべし

ゝはたらきことばのこと

はたらきことばとは　咲かん　さかず　さきて　さきけり　さく　は
な　さけば　などゝはたらくことばをいふこれをしるにはまづ五十
音をしるべし

あいうえお
かきくけこ
さしすせそ
たちつてと
わゐうゑを
はひふへほ

まみむめも
なにぬねの
らりるれろ
やいゆえよ

咲くといふことばのごときはかきくけこ一二三四の活なりさかんさきてさくさけはとはたらきてさことはたらかず起くといふことばのごときはかきくけこ二三の活ありおきんおきておきばおくおくるおくれとはたらきてれかんおけばなどはたらかず受くといふことばのごときはかきくけこ三四の活なりうけんうけてうけばうくうくるうくれとはたらきてうかんうきておどはたらかず

いづれのくだりにも一二三四のことば二三のことば三四のことばと

いふみつのわかちありてきれつづき過現未すべてひとしからずこのみつのわかちにめをつくれば又一貫の用法ありてにをはの結びもなにもよくわかるものなり

てにをはのむすび

古歌にぞろこれおもひきやとはやらんこれぞ五のとまりなりけるといふうたありこのこゝろは花ぞといへばさきける。花こそさきけれ　おもひきやはおさかんとは　花はさきけり。花やさくらんといふたぐひをよめるあり今このうたになずらへてにをはの結びをうたによみてしめすべし

はもかろしぞとうたがひはやゝおもしとうはすぐれてれもきてにを

は

はもかろしとハ花も花はなどいいふとゝろかろきあり花ぞ花やは

やゝれもし花ところはすぐれておもきあり

かろきをばかろきにて又むすぶゆゑはものとまりはみおきれ字なり

花もさきけり花はさきけりなどゝつねもきるゝことばにてむすぶをいふ

ぞうたがひやゝれもき故つねつゞくことばをきりてむすぶなりけり

花ぞさきける花やさきけるといふたぐひをいふなりさきけるはもとつゞくことばなりこゝろみにいひてみるべしさきけり花といひてはいかにいひてもつゞかずけりはきれ字あるゆゑありさきける花といへゝつゞくけるはもとつゞくことばなる故ありぞ疑は言意やゝおもき故つねはつゞくことばきれ字となりてろのむすびとなるありところゝみにいひてみるべし花ぞさきける時とはいはれず花ぞにひかれてつねつゞくける轉じてきれ字とあるにより時へつゞ

かぬあり

つねゝぞへつゞくことばをつゞかせずこそのむすびにするものとしれ

花ところさきけれ　花ところさきしか　花ところさくらめ　などいふたぐひにてこゝろうべしつねはさきけれぞさきしかぞさくらめぞあゝみあぞへつゞけいふことばどをはなれてころのむすびとなるあり

以上四首はてにをは結びとばの大綱をよめり

過去のきはきるゝことばぞしはつゞくしかとしいへばぞへつゞくなり

花もさきゝ　花はさきゝ

花ぞさきし　花やさきし

花こそさきしか

現在のしはきるゝありきはつゞくけれとしいへばぞへつゞくあり

花もよし　花はよし
花ぞよき　花やよき
花ところよけれ
しにてきれしきにてつゞきしけれにてどへつゞけいふ現在もあり
花はよろし　花もよろし
花ぞよろしき　花やよろしき
花こそよろしけれ
けんは過去らんは現在あん未來きれ字ともありつゞきともある
花やさきけんは俗にさいたであらうといふこゝろ
花やさくらんは俗にさくであらうといふこゝろ
花やさきあんは俗に時がきたらさくであらうといふ心
さてこのけんらんなんはきれともなりつゞきともなることばなり

さきけん又さきけん花さくらん又さくらん花さきなん又さきなん
花かくのごとしこれにより
花はさくらん―花もさくらん／いづれのとまりにもあるあり
花ぞさくらん―花やさくらん＼
どへつゞくときはけめらめなめといふこゝろのむすびもこれとしるべし
花さきけめど　花さくらめど　花さきなめど
花ところさきけめ　花ところさくらめ　花ところさきあめ
はきるゝぬはつゞくなりねといへばどへつゞけいふことばなりけり
花はさかず　花もさかず
花ぞさかぬ　花やさかぬ
花こそさかね

ぬつはきれぬるつるつゞきぬれつれはどへつゞけいふことばなりけり

花もさきぬ　花れさきぬ

花ぞさきぬる　花やさきぬる

花ところさきぬれ

花もさきつ　花はさきつ

花ぞさきつる　花やさきつる

花こそさきつれ

ぬるとつるとのわかちはぬるは緩(ゆるやか)にてつるは急(はやし)なりくはしくはことばのすみなは第二稿結語對格にいへり

一のなんばねがひのなんぞ二のなんは未來のなんとわけておくべし

花もさかなん

花もさきなん

いづれのことばもこれにおずらへてをるべし

四段にてけせてへめれどへつゞくところのむすびもこれとしるべし

四段とは一二三四のはたらきことばをいふ風ふかんふきふくふけのたぐひふけどおせどたてどれもへどくめどとれどのたぐひなりこゝろのむすびとなれば風こそはふけ車こそおせ波こそたてものをこそおもへ水をこそくめものをこそとれとなりこれらどへもつゞかずこゝろのむすびともならぬときは下知のことばとなるありふけおせたてれもへくめとれみな人にいひつくることばなり

四段にてくずつふむるはきれつゞきふたつをかぬることばなりけり

風はふく　風ぞふく　波はたつ　波ぞたつ

風はふく　又ふく　風　波はたつ　又たつなみ

きれつゝきをかぬるゆゑはのとまりにもぞのとまりにもなるなり

二三三四三にてはきれ三へ又るをそふるときつゞくなりけり

起き　れく　落ち　れつ　あゞは二三のことばなり

受け　うく　助け　助く　あゞは三四のことばなり

これらのおくおつうくたすくなどはきれ字にかぎることにてかの

ふく風などのごとくつゝく理あしるをそへておくるれつるうくる

たすくるといへばつゝくされば

はやくも起く　このはは　はおつ

はやくぞれくる　このはそおつる

二三三四どへつゝく時三の下へれもじをいれていふとしるべし

れくれど　れつれど　うくれと　たすくれど

早とそおくれ　花ゐそおつれ　おほせをこそうくれ　人をとろた

すくれ

くはしくは玉のをやちまた玉あられわがあらはせるすみなはをみよ

玉のを玉あられは本居宣長翁の著述なりやちまたは同春庭翁の著

述うのたらぬをおぎなひうのあやまれるをたゞし隆正ことばのす

みあはをしるせりとことばのすみなはは總名にて通略延約辨は刻本

あれりつぎて結語對格人天合離對格等を刻しいだすべし

ゝかなつかひ

いろいはひいしいへいほりいといさでいそいもいさをはしのいをか

く

弓をいる鑄る入る愈るははしのいぞ居る集るまゐるれくのゐをかく

ゐでゐせき山の井あぢさゐあゐふすゐくれなゐゐのれくのゐとし

れ

かひのくにとひたひやまひはひあひだまひよひのたぐひいにはひを

かく

くちにてはわうをにていふことをはひふへほかく調おほかり

おもばん　おもひ　おもふ　おもへ

いはん　いひ　いふ　いへ　このほかれはし

かへかふるさゝへさゝふるそへそふるこれらの人爲はの三四あり

人爲とゝ人のするをいふ自然にあらぬをいふ

うをうゝるすをするのそのほかは大かたゆえのかよひなりけり

とえ　とゆる　きこえ　きこゆる　さかえさかゆるのたぐひ

おいおゆるくいくゆむくいむくゆるのゆるにかよふゝはしのいとしれ

をかをじまをぢをばをとめをるたをるをちかへりあくをどるゝしの

を

をとこをみあをばなをぐるまをけをはりをのをのをかしをしむはし

のを

おはおはしれくつゆおくておくおもふおほにおどろくおくのおとし

れ

あをうをさをさをしかのほかはほの字にて下におくのおかくことは

おし

すぢやまぢをぢのたぐひはちのにごりふじきじにじはしの濁りあり

はづとづるまづのたぐひはつのにごりくずかずねずみすの濁りなり

いうたよむこゝろねくさ〳〵

題意のふれぬやうによみおほゆべし題は的のごとしこゝろは矢のご

どしことばは弓のことしよむはいるがごとし調は体のごとし矢は的

にあたるをよしとすされど弓にくるひありてはあたらず体のかまへ

あしきはいかほどよくあたりてもいやしくしてみるにたらずこのこゝろをよく〳〵こゝろにしめておほねをるべし

うたのよみはじめにはかずおほくよむべし人に聞せてわかるやうにきこゆるやうにとこゝろがけてよむべし趣向と詞とはちかきころの上手の歌にならふべし紅塵集草野集のたぐひすべて近きころの人の歌をおほくよみてみるべしちかきころの上手ゝわかるやうにきこゆるやうによみたるものなればならひやすし近きころのうたばかりみるもよろしからず古今集をまじへよむべし古今集をよむにはしひてうたの心をとかんとせずたゞそのしらべにこゝろをつけてつゞけからいひまはしのすら〳〵ととゝこほりおきをみてそれにならふべしくりかへし〳〵よむべしつねにうの口調になれてをればおのづからおのがよむうたのしらべうれにうつりてよろしくなるおり

題をとりたらんには題とおもふべからず實とれもふべしたとへば山花といふ題をとりたらんには實に山にゆきて花をみる心になりてよむべし河月といふ題をとりたらんには實に川べにゆきて月をみるこゝろになりてよむべし

時所位をうしなふべからず時とはいまをいふむさしのゝはらをはてなきことによめるはいにしへのことにて今は田畑村里たちつゞきてありいまのようにうまれてくさばはておきむさしのゝ原などよむはことぢに膠するたぐひなり所とはわがをるところをさだめてよむべし山家羈旅などいふ題にては山家にすみ旅する時のこゝろにありてよむべし江戸のある人「すまのうらのもしほのけぶり夜たえてあはぢのしまをいづる月かげとよみけり」すまよりあはぢは西にあたりてあり位とは庶人にて官位ある人のまねをし禁中をたちならすさまによむ

はわろきをいふなりれのが分限をまもりてよむべきなり
人はつねに忠孝仁義廉勇のこゝろをわするべからずされどうたにそ
のこゝろをよまんとするはわろしたゞそのこゝろざしある人のうた
はなにとなく底にちからありてめでたきものなり
戀のうたは淫靡にながれぬやうによむべしたゞ實情ふかきをよしとす」
うたはすべて人情のまことをいふものにていつはりもあくかざりも
なきうぶのまゝのまこゝろをいふにより人もめで神も感じたまふあ
り心のそこよりいづるまことにあらざれば人のこゝろはうごかしが
たきものとしるべしさるをこゝろにもあきいつはりかざりをいふは
わろし

歌學入門 終

明治廿七年十二月廿日印刷
明治廿八年一月廿日發行

定價金五錢

著者 故 大國隆正
相續人 大國照正
發行者 東京市麹町區四番町十五番地

校者 子爵福羽美靜
東京府下南豐島郡淀橋町元角筈村百八十五番地

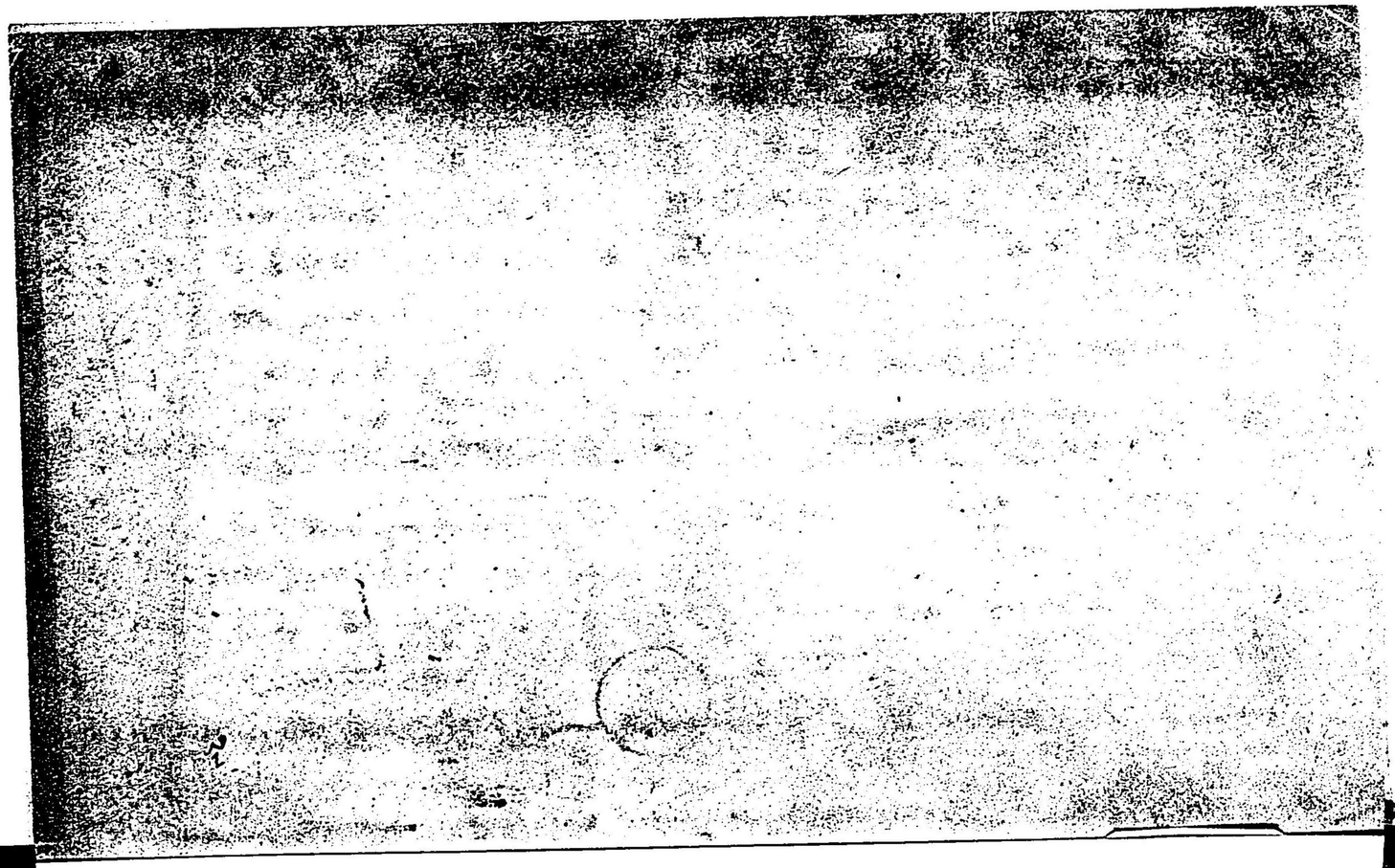
印刷者 八尾新助
東京市神田錦町三丁目八番地

發賣 八尾書店
東京市神田區表神保町

書肆 片野東四郎
名古屋市玉屋町

田中治兵衛
京都市寺町四條北

版權所有



特50
440

歌学入門

大国隆正

国立国会図書館

085769-000-2

特50-440

歌学入門

大国　隆正／著

M28

DBD-0285